

## 紹介

## ● 堺市史

## 堺市史編纂部編纂

大正十三年東宮御成婚記念として堺市に於て市史編纂の業が開始されてより五年、今回三浦博士監修の下に同市史編纂部の努力によつてその一部——全部の豫定として本編資料編各三冊と別編一冊の中先づ本編第一（第一卷）資料編第二第三（第五第六卷）の三冊が世に送り出された輝かしい過去を持つ堺の歴史が學問的に整序されて學界に寄與する點多きを思ひ今之を紹介し得るのを喜びます。

本編第一は三編に分たれる。第一編地理概説では土地の自然的價值が人類生活に持つ影響に注意して地質・氣象の二方面から地理的概観がなされる。第二編黎明期の堺は濠洲より南北朝時代迄を含む。「上古に於ける近畿港灣の發達」「原始期の堺」「堺の地名」「傳説の堺」によつてこの地方の古代文化一般に就ての興味ある記述の後に、

「記録に現れ出した堺」で鹽湯の名所として熊野詣の王子所在地として始めて傳説の薄衣を脱した堺の出現となる然し私達の歴史的興味は「堺莊の成立」に聯り、後世商業都市としての活動の第一歩が見られる。「堺莊と住吉神社」この關係は延元元年四月後醍醐天皇の綸旨によつて確にされるが、住吉神主の勤王は堺の南朝支持となり、建武四年堺莊民が吉野通謀の嫌疑によつて魚貝營業を禁止された爲春日神供の闕乏を來した如き興味ある事實が展開される。南北朝抗爭は海軍の活動海賊の利用によつて「港灣の利用」が重要視され「南朝と海賊」の關係の密接より港灣の軍事的活動の中心となつた事が兵庫・敦賀津に就いて説かれて「堺の軍事的價值」の理解に導かれる。かゝる戦亂裡にあつて、比較的平和を保ち得たるは港灣としての活動から増進された「堺の繁榮」はおのづから「堺の文化の曙光」を生み、遂には正平版論語の刊版でふ不朽の事業の實現ともなつたことを舉げて、その開版者及びその内容の性質價值に就いて詳細な考證が試みられてゐる。第三編全盛期は室町時代より豊臣時代迄を含む

室町時代全盛までの過程として「室町初期の堺の管轄」で堺が人々の争奪の目標となつた跡を辿り、更にこれを理由づけるものとして「堺の段富」が幕府の有徳錢の賦課徳政一揆なきから説かれる。次で對明外交に於ける關係に至つて本書の興味は項點に達する。先づ「足利幕府對明貿易」の真相とその變化に關する簡明で要を盡した敘述に次に見る堺商人の外交貿易への進出の重要性を理解する用意が示され、「日明貿易」堺との新關係は應仁文明内亂の幕府と大内との關係より生じて、「第一回遣明船の堺開帆」に至る。彼等はその準備として幕府の命を奉じて琉球に渡航し堂々たる幕府の遣明船を堺の一商人たる湯川宣阿が沙汰する如き深き關係が結ばれたが更に「第二回遣明船の堺開帆」には堺の商人が公方船二隻と内裏船を請負うて貨物の調達船舶の艤裝をも支配し、大内氏を排して之に代る如き進出を見せてをり、その歸港も亦堺住民の歡呼裡に夥しい唐物を齎らした事情を述べて、一商業都市が一國の外交貿易を支配しその繁榮の描寫を以て本編を終るが以上二篇は殆き三浦博士に執筆に係る

以上一々に就いて細部に互りすぎたかと思はる、内容紹介の目的は、地方史としての本書の有つ特殊の構造に就いて理解を求めんが爲に外ならぬ。本書の最大特色は實に堺市なる一地方の歴史たるに拘らず多く他の地方と聯關して全國的に考へられてゐる事である。例へば堺の港灣的價値を論ずる前には當時の港灣の代表として兵庫・敦賀等を説き、それらとの對比によつて堺港の占めた位置を明かにし、對明外交貿易においても堺商人の獲得した位置の重要性をそれまでの外交貿易の意義と真相を理解する事によつて初めて明かにせしめんを試みる。斯様の立場から着筆された本史に依つて始めて日本史の動きの中にある堺としての眞面目を傳へることが望まれるのであらう。その他にも多くの優れた點があるに拘らず、私は他の有觸れた地方史の容易に追隨を許さぬこの特色を特に強調したい。

資料編は第二より第三の前半にかけて第四編爛熟期資料が社寺・市政・港灣・商業・工業・漁業・交通・農政・人物教育關係によつて分類されてをり、第三の後半は第五編整

頓期資料が墾事件・御用金・市政・産業・港灣・教育關係によつて分類されてを、商業都市貿易都市としての特殊等各種の史料が多く盛られてをるから、その文化研究の上に貢獻する所は多大であらう。因に本書の實費頒布は堺市役所及び印刷所東京三秀舎の兩所で取扱ふことである。（菊版、第一卷五二三頁、第五卷六七二頁、第六卷九五七頁）〔藤〕

### ● 古代研究

#### 民俗學篇第一

#### 國文學篇第一

折口信夫著

二書ともに我古代史の研究に對して、新趣の問題を提示してゐる點、近頃の著作中、異彩を放つてゐる大著である。著者は早く日本民俗の研究に着手し、土俗、傳説、郷土慣習に關する深い興味をもち、其の研究は幾多の雜誌上に發表されてゐた。此書「民俗學篇」にては、日本民俗についての種々の方面が考究せられてゐる。日本の民俗學は尙ほ僅かに其歩を踏み出したばかりである。現時は學界の注意を惹くやうになり、歐米に於ける人類學、社會

學・文化史研究の方法考察が採用せられて、從來等閑に附せられた古代の民俗生活の一面が漸く明らかになり、其價值を見出されんとしてゐる。著者の民俗學研究は獨有の立場と觀點とを鮮明に出してゐる。従つて二著作ともに歐米の民俗學研究に依るよりは、却つてそれ等に依る人を教ゆるところがある。

「民俗學篇」にあつては、「砦が國へ・常世へ」の一章に於て、異郷意識の起伏を論じ、母權時代の佛や、常世國に關する思想的變遷をこれに考へようとする。「古代生活の研究」には近い時代の「寶船」の考や、「まれびみのおこづれ」にして神の來臨を論ずるなまき特色がある。「琉球の宗教」には巫女の話が説かれ、「最古日本の女性生活の根柢」「鷄鳴と神樂」「髻籠の話」「だいがくの研究」「村々の祭り」「盆踊りと祭屋臺」なまきの興味ある問題が掲げられてゐる。

しかし總じて著者の研究は標題の其文字面から直ちに其内容が想像されるのことは違つて、かゝる題目の各々の内にも實は多方面な問題が盛られてゐる。著者の博搜と